

## 分科会（１） 「青少年」

平成14年10月19日（土）午後1時～3時  
さくら会館3階第2集会室

コーディネーター：長谷川 貞夫 氏  
プロジェクトチーム：新・少子化（仮称）PT

### 《司会》

「いっしょに話そうまちづくりフォーラム」青少年分科会をはじめさせていただきます。司会を担当させていただきます、企画財政部の並木です。よろしくお願いいたします。

それでは、コーディネーターの紹介をさせていただきます。この「青少年」につきましては、長谷川貞夫先生をお願いいたしました。先生は市内にお住まいで、学芸大学の教授をされております。なおかつ、福生市の教育委員もされております。福生市の教育につきまして多大なる貢献をされている方でございます。本日もどうぞ、よろしくお願いいたします。それでは、先生、お願いいたします。



### 《長谷川》

私は確かに福生市では、教育委員であるとか、体育協会の関係であるとか学校教育、社会教育とお世話になっているわけですが私は教育の専門家ではありません。東京学芸大学に入学し、東京学芸大学を卒業いたしました。ご承知のとおり東京学芸大学というのは、教育がすごいのだろうなと思いかもかもしれませんが、私自身は化学をやっております、いつのまにか、福生市のおかげで勉強をさせていただきました。青少年というテーマですが、子どもが生まれて年を取っていく間に生涯学習というのがいろいろあるわけですが、家庭の教育力がかならずしも十分ではないというところで、例えば東京では「心の東京革命」であるとか、文科省では小中学校に道徳の時間を設けるとか、その道徳の心は何であるかといった、みんなで青少年を育てましょうということ、今日はみんなでそんなことを勉強できたらいいなと思っております。

### 《司会》

それでは、本題に入ります。市の状況ですが、市では平成12年度から子育て支援という形で、政策課題別チームというプロジェクトチームで検討をしてきております。その中で今後の大きな課題といたしましては、6つの課題が挙げられております。一つには保育対策、二つ目に無認可保育対策、それから幼稚園対策、学童クラブ対策、児童館対策、子育て支援対策についてです。そこで、今日の方針である青少年ということになるのですが、今申し上げましたものは、就学以前といいますが、小さい子どもについての検討になります。そこで、今度は、少子化（仮称）プロジェクトチームということで、10月1日に新たなプロジェクトチームを立ち上げました。まだ発足したばかりですので、これからどんな形で進めていくのかということも今後の課題でございます。そういう意味でも、皆さんからご意見をいただく中で進めていけたらなと思います。町田課長のほうからこの部分について、少子化のプロジェクトとしての思いをお願いします。最初に、今日は参加者が少数ですので、参加者の自己紹介をお願いしたいと思います。

### 《Aさん》

長沢に住んでおりますAと申します。現在は高等学校の生徒を世界中から東京地区へお招きして、その生徒20人ほどに研修をして高校へ送る。また、日本の子どもをこれも20人ほどですが、世界のどこへ出しても恥ずかしくないように研修をして世界へ送るということをしております。長谷川先生のご高説をお聞きして、今の青少年の仕事に役立てたいものですから、ここで皆さんや先生のご意見をお聞きして勉強したいと思っております。

### 《Bさん》

南田園から来ましたBです。最近、幼児の知的障害と健常児とのちょうど間のお子さんが増えているということと、20歳でうつになる青年が多いということでそれに関心がありますので、お話を伺いたいと思い参加いたしました。よろしくお願いいたします。

### 《PT新居》

新居と申します。私は福生の中央図書館に勤めております。私は今回の10月から始まったプロジェクトに参加しております、いろいろと考えてみた

いと思い今日は参加しました。よろしくお願ひいたします。

《Cさん》

P T A会長をしておりますCと申します。子どもが中学生ということで勉強をさせていただきたく思ひ、参加させていただきました。よろしくお願ひいたします。

《P T 高山》

福生市の保健センターで保健師をしております高山と申します。私も10月からプロジェクトに入りました。今日はいろいろ教えていただきたいと思ひまして参加しました。普段、保健センターで仕事を思ひて思ふことは、2～3年前からなのですが、若年層の妊娠出産が目だっていることがうちの職場でも課題となっております。よろしくお願ひいたします。

《Dさん》

Dと申します。福生第3小学校に勤務しております。わたしはあきる野市民なのですが、ほとんど福生市民のような感覚で毎日を過ごしております。大切なお子さんをお預かりし、未来の福生を創る、世界に羽ばたいていくような、そういう人を育てなければいけない場である学校教育を預かっております。そういうことで、今日は長谷川先生に教えていただき、また直に市民の方々の意見を伺ひ、またこちらの考えも聞いていただきたいと思ひ参加しました。

《Eさん》

福栄地区で青少年育成委員会の地区委員長をやっておりますEと申します。青少年の地区委員長という形で、地域の子供達といろいろな行事を行ひ、また少年野球のコーチもやっている関係で青少年の育成に関することには関心を持っております。それで、自分の子どももそうですが、福生の子供もというか近くにいる子供達にもなるべく多く関わっていきたく思ひて思ひております。今日は皆さんの色々な意見を聞きながら勉強したいと思ひて思ひますのでよろしくお願ひいたします。

《P T 真野》

福生市の保育園に勤めております、保育士の真野です。私も10月から少子化のプロジェクトチームに参加しています。普段は1歳から5歳の子供達と毎日常生活しております。楽しい毎日ですが、最近青少年の犯罪など耳にすることが多くて就学前の子供達を扱う私達の責任は重大だと思ひて思ひています。今回は先生をはじめ、色々な方のお話を聞きしたいと思ひ参加しました。

《Fさん》

Fと申します。Eさんと一緒に青少協の地区長をやっております。子供のことに關しては、地域の中に思ひて思ふのは社会のいろいろな問題が一番番

い子供に出るといふことです。子供に關していろいろなレベルできちんと捉えていないと、またいろいろなものが地域でできない限り、その国の未来は危ういものになってしまうのではないのでしょうか。そんなおかげさなことでなくても、子供は好きで實際、委員とかをやっているのも子供からエネルギーをもらっているのだからできるような気が思ひます。で、行事とかいろいろな形で関わっておりますけれども、常に人と接したときにはいただくものは大きいかと思ひ、今日はお話を伺ひたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

《P T 町田》

社会教育課の町田と申します。よろしくお願ひいたします。私はこの4月から社会教育課へ来たものですから、青少年を語れと言われましても、なかなか語れないと思ひます。ただ、行政側で対応している、あるいは対応していかなければいけない部分のお話はできるかと思ひますので、よろしくお願ひをしたいと思ひます。

《司会》

ひととおり自己紹介をいただきました。ありがとうございました。それでは、市の取組みをまずお話しします。市の取組みは、以前の子育て支援のプロジェクトは青少年といふこととは少しかけはなれております。そこで、新たなプロジェクトが立ち上がりましたので、リーダーである町田課長から今後の思ひですとか、皆様方への問題提起も含めてお話ししていただけたらと思ひます。

《P T 町田》

10月1日付けで、新少子化(仮称)プロジェクトチームを立ち上げました。以前の子育て支援という形でのプロジェクトチーム、これは福祉関係が基本になったプロジェクトチームといふことで福祉の視点で捉えた内容になっています。今回の新少子化プロジェクトチームはもっと広い意味で子供に対してどういふ関わり方をしていけばいいのかという視点から、福祉に限らず子供と関わっている分野からそれぞれメンバーを集めまして、いわゆる生涯学習という視点で広く捉えた中で、生まれてきたお子さんが青年になるまでの関わり方、いわゆる家庭、親の義務とか地域の関わり方ですね、互助という形になると思ひますけど。自助、互助、公助といったことの体系化をしていこうといふことからこのプロジェクトチームが発足したわけなんです。どういふことかと申しますと、現在、市でも子育てに関する事業をいろいろ実施しているのですが、市民の方がどこへ行けば適切なアドバイス等を得られるのかまったくわからないといふご意見があったのです。行政側としてもここへ行けばこれだけのことがわかるいふことを明確化する中でPRしていこうといふことから、このプロジェクトチームが発足したわけなんです。先ほどお話ししたように、10月1日に1回目の顔合わせ的な会議という形で開催いたしました。ですので、まだどういふ検討をして

いるというお話しはできませんけれども、一応動きとしては、まず家庭としてやるべきこと、親の義務ですね。それと地域がどの程度関わっていくべきかということ。あるいは市としてどのような支援、また支援しなければいけないもの。その辺のところをきちっと整理していきたいと考えております。以上です。

《司会》

新しいプロジェクトについて、今、リーダーからお話しがありました。行政というのは仕事が縦割りになってしまっているの、その部分を横につなげた一貫したものが必要ということから、プロジェクトもメンバーが12名で、児童福祉課、健康管理課、学校事務、社会教育、公民館、図書館、学童クラブ等の職員で組織されています。これを横につなげていろいろ検討をしながら、縦割りを横割りにした体系化やネットワーク、そういったものをつくるべきではないか。これは非常に難しい部分があるかと思うのですが、その辺りをこれから取り組んでいくことであります。

《長谷川》

実はこのフォーラムを計画するにあたって、並木企画財政部長(司会)が各部、課へ出した文章があります。今日の参加者の皆さんにこれを紹介したいと思っております。とってもいいことが書いてあります。「新少子化(仮称)プロジェクトチームについては、少子化については今まで児童福祉課が中心となり、主に保育施策についてプロジェクトチームで検討を行ってきましたが、新たに視点を変えて子どもを広い範囲で捉えた市全体で取り組む体制を構築するためのプロジェクトチームを構成することになりました。」とこのような文章を見せていただきました。今日参加している市民、私も含めて大変ラッキーで、これから市がやろうとしている方向を私達の提言でいけるのですよ。ここに青少協だよりがありますが、これは10月15日に配られたばかりのものなのですが、「東京都の区市町村で心の東京革命行動プランを推進しています。」と書かれていますが、ここに書いてあるのは、「家庭への期待」「地域への期待」「学校での期待」要するに家庭と地域と学校が三位一体となって、三つがうまく連携して子育てをやっていこうということなのです。ある私立学校の先生と話していたときに理科の実験の話になり「お子さん達、けがさせたら大変でしょうね。」と聞くと、「いや大変なのですよ。」と予想通りの答えでした。どう大変かということ、ご父兄が直ちに飛んできて誤るそうです、学校に、先生に。「うちの家庭では、まだしつけが十分できていない」と。すなわち先ほど言ったように自助、自らを守るという、そういう教育が家庭教育としてのひとつの理想だと思っておられる。ある意味では戦前の日本のいい面であるかもしれない。そういう一面も今、少し欠けてきていると考えるとすると、どうしたらそういう心になれるのかというあたりのことを一つの視点にして、これは誘導的ですが、自分を

守るというためにはどうしたらいいかという視点で市民の方から考えてみたい、公の方はそのこともそうなのですが、人に迷惑をかけない、あるいは他人として公として守るべきにはどうしたらいいか、たぶん教育の育とは育つと書いてあるけれど、実は我々は生物ですから、生物体を守ることが第一なのですね。そんなことであろうかと思うのですが、その視点からご意見をいただくというのはどうでしょうか。私の意見はおかしいということでも、賛成ということでも。

《司会》

その辺で、町田さんはいかがですか。今のお話しは。

《PT町田》

基本的には、先生のおっしゃったとおりで、これは防災の意識と同じですよ。まず自分で自分の身を守るという。これは非常に大事だと思います。ただ、やはりそうは言ってもという部分はあるかと思えます。なので、そうは言ってもという部分も捉えながら進めていきたいという思いです。まさに、先生がおっしゃった通りだと思います。

《司会》

今、先生のお話しがございましたが、これに関連して何かご意見のある方はおりませんか。

《PT新居》

先ほどの私学の話して、自分の子どもがけが等をした場合、親の方が謝っていると。ちょっとびっくりしました。

《長谷川》

私もびっくりしたのです。例えば、ナイフを使うとします。このナイフの使い方は家庭教育だということ。学校でもやりますけれども、今はどうでしょう。ナイフなんか持たせないですね。

《Dさん》

そうですね、タイミングですね。使うこともあります。



《長谷川》

私、学校へ行って、彫刻刀を使っているのを見て怖くてしょうが無かったですよね。けがをするに違いないと思うのだけれど、けがをしないのだよね、子どもって。でも、けがをしないように教えるのは、学校と家庭のなかですね。でも、家庭では彫刻刀は一般的には使いませんから、それは図工なら図工の授業の時に習うのですね。要するに場をちゃんと見るということなのです、先ほどの親は。「うちの子は場を見られるようにしているはずなのに、まだできていない」と。もちろん学校にも当然責任はあるわけですよ。全てが家庭の問題だと申し上げているわけではないし、そういう風に聞いたわけでもない。

《司会》

他にどなたか。Dさんどうですか。

《Dさん》

私のテーマは、自立という言葉がキーワードです。子ども達に望むことは、自分で自分の力で生き抜いていける子どもに、そういう人に育てて欲しいということです。それで次は自分らしく心豊かにということ。まず自分で生きていく、自立心を植え付けていくということが、本校のテーマでもあるのです。自分で自分を守るということは自立の第一歩ですから、それからまず自分の事は自分でしましょうということ。そして、自分の事を大切にしている子どもというのは、よく言われているように相手のこと、お互いが大切な存在だとわかっていくのだと思います。私はこの自立という言葉にこれからもこだわって教育をしていきたいと思っているし、子ども達は親御さんから離れて一人で生きていく、そういう力を学校で学ぶ中でつけることが、まず必要なのではないかと思っています。

《長谷川》

日本の子どもに比べて、外国の子どものほうがしっかりしているとそういう評判があるそうなのですがどうでしょうか。

《Aさん》

私ども、子ども達が世界中から来るのを見ているんですけど、これは子ども達を受け入れてくれた学校の教頭先生が言っていたのですが、「皆さんの前言いづらけれど、自分の所の子どもと比べて、外国から来た子ども達は、非常に行儀、マナーがいい。あと自立心が強い。うちの子ども達にはこの面が欠けている」と。他の学校の先生方も、外国の子ども達のほうがしっかりしていますねと言っております。そういうことだと、やはり教育や親のしつけが欠けているということなのでしょう。

この前、文科省の方から学校評議員制度があると聞きました。私はそういう制度があるとは知りませんでした。あと、学校へ講師として派遣するための名簿を市町村の教育委員会へ提出しろとも言われました。私達の中央ロータリークラブには45人のメンバーの中で医師が15人いるのですが、医師と

してできることであれば講師として派遣する、私にもできることがあればボランティアでやるようにとされています。

それから、学校の先生、生徒に私達の職場、会社を経営している方、老人ホームを持っている方等いらっしゃいますがその仕事を体験してもらうために事業所を開放しろと、もし開放できるのならば先生や生徒に職場、仕事を教えて欲しいとも言われています。この様な制度を私は知らなかったのでお聞きしたいのですが。

《長谷川》

学校評議員制度、これは文科省が各学校の地域の方々からのバックアップをもとに学校を運営していきなさいとのことで、まだ全国全ての学校には行き渡ってはいません。福生市は東京都の中でも比較的早い時期に、完全なボランティアによる学校評議員制度ができました。

特に学校運営に対してより理解を求め、その方々のご意見をうまく反映、あるいは校長は意見の反省をし、それをより良いものにして学校運営をしていこうとこれが学校評議員制度です。そして今、文科省が言ってきているのは学校評議員に評価も加えたらどうかということです。それから地域の人達の職場であるとか講師、これも同じ意味でありまして、要するに地域のいろいろな活力を学校教育に生かさないといふものですね。

《司会》

今、Aさんから青少年の育成というお話しもありましたが、その辺で親のしつけとかFさんどうですか。

《Fさん》

今、Dさんから自立というキーワードが出たのですが、私はポイントになるのが自分の位置だと思っています。ですから、自分の位置がどの位置にあるのかということとその子ども、あるいは自分自身知らなければならない。知ってはじめて、ここが足りないからこうしようとか、わからないから調べようとか、いろいろな方と話したり、いろいろな機会に出て行かないと自分の位置はわからないですよ。例えば、今車社会で、家族で出かける時は車でいきますね。車の中は自由で、飲み食いしたりします。そういうことで電車に乗ると、子どもは同じ感覚でやりますよね。ですからきちんと電車にも乗せて、こういう時はこうしろと教えなければいけない。今は公私というのが昔以上にわかりにくい形になっている。能率とか、一人の人権とかそういうことで、分け隔てというのが意外となくなっている。だから、それに惑わされてきちっと教えていないことがいろいろありまして、その辺が自分の位置がわからないで、自分はこんな位置だと思っていたら、とんでもないこんな位置だったということがあるわけですよ。ですから、その位置を子ども、青少年にはきちっと教えてあげる。そのためには、いろいろな機会にいろいろな方と異世代の人とも接する機

会を設けて、あるいは先ほどのナイフの使い方でも実際ナイフを使える子どもと使えない子どもがいるわけですよ。で、使えるようにするには、どんなことでもそうですけど、物事は日常化しないと。一つ一つ毎日やることを子どもに与えて、子ども達が自分の身体を使って、生きている実感みたいなものをどこかで感じるものがないと、子どもはいきいきしないなと切々と感じています。あと、昔はお母さんが具合の悪い時はおばあちゃんが代わりに食事を作れたのですよ。ところが今はお母さんの具合が悪くなった時にどうなるかと言うと、お父さんは仕事で、子どもはコンビニ等で外食という形ですよ。少子化というのは常に自分の代わりがないということなのですよ。また、少子化というのはいろいろな問題が凝縮した形で現れていると、子どもの世界でも今までは親には言えないけどお兄ちゃんには言える、母親には言えないけどおばあちゃんだったら言えると。家庭の中でもどこかに緩衝材があったのですが、三角形みたいに。親と子との間に何もなくて、その関係がうまくいかない子どもは持って行き場がない、地域でもそういう人がいない。自立ということ考えた時に自分の位置をきちと教えていくことで、子どもなりにその位置を認識してくると子どもは絶対自分でやりはじめます。自分から意識を持ってやらないと習得できませんから。子ども達がいろいろな世代の人達と関わりを持ったり、接触したり、またいろいろな場面を体験させてあげたいなと思っております。

#### 《司会》

今、話しの中で「地域」ということが出てきましたが、Eさん、今までの経験の中で何かありましたらお願いします。

#### 《Eさん》

先ほどからお話しがあるように自立という問題に関して、今年の8月に1泊2日で近所、地区の中にある公園で、小学校1年生から6年生まで70名ほど参加してキャンプを行いました。自立という面では親のほう自立させていないというか、親が自立していないケースがあります。キャンプでは食事の買い物から各班ごとに自分達でやらせました。お店の中では自由に1班2,000円でカレーの材料を買うようにさせましたが、一つの班がカレーのルーを一箱しか買ってこなかったのです。大人の目から見ると、食材や水の量からカレー粉は足りないだろうと思うのですが、薄いカレーを食べて「しまった、この量だともう一箱必要だった」と感じるのも勉強かなと思って僕は黙っていたのですが、その班のお父さんの一人が「絶対足りないから、私に買いに行かせて」と言い出して一悶着ありました。これも勉強だし、本人達が気づいて買いに行かせて欲しいと言い出したのならともかく、各班同じ金額を使い切って帰って来たのだから、やらせてみたらということ言ったら、「絶対足りないから買いに行かせる」と言うので、これは主旨に反するので、今回は見守っていただきたいと思います。このこ

とからも、出来上がって答えが出る前から親のほうで「これは絶対失敗だから」とか、「これを足してみなさい」という対応をしてしまうと実感として子どもに身につかないのではないかなと思います。危険を伴う失敗は事前に食い止めるべきべきだと思いますが、今回のような失敗はどんどんやらせてみて覚えていってもらいたいなと感じました。

#### 《長谷川》

待つ教育という、保育園から大学、大学院問わず、ありとあらゆるいわゆる教育という場面では、いかに待てるかということなのです。また、待つタイミングをどうするのか。

Bさんに質問したいのですが、今、関心を持っている分野でこういうことがあったらいいなというものはありませんか。



#### 《Bさん》

情緒障害児だとか、知的障害ではないのだけれどそのような子だとか、うつな青年とかは自分の事ができないのだろうと置いていてどういう対応をしたらいいのか、ちょっと勉強したいと思って今日は参加しました。

#### 《司会》

今のお話しを受けて、高山さん何かご助言はありますか。

#### 《PT高山》

私は普段仕事をしていて感じるころがありまして、それをお伝えできればと思います。乳幼児期の健診だとか予防接種でお子さんが一度に多いときは100人くらい集まることありますが、集まる場で親子を見ていて子どもを叱れない親がいます。子どもが危険なことをしているのですが、事故に至る前に未然に食い止めなければいけないのに危険なことも区別できなくて、あまりにも私達が見るに見かねてお母さん達に注意を促したりすると、何故危険なのかそういうことも教えられなくて「この人が怒っているからやめましょう」とか、そういう伝え方しかできないお母さん達がいて気になっているのです。あとは、人がたくさん集まる場で、若いお母さんとかが自分の座っている隣に自分の荷物を置いたりして、これを下に移動させれば

もう一人座れるのにと。こういうことも伝えてあげないとできないお母さんが多くいたりして、こういうことを私達が声を出して伝えていかなければいけないのかなとつらい部分もあるのですが、簡単に言うとお母さん方が自己中心的な感じというのがすごく目立っているのですね。人はどうでもいい、自分達さえ良ければいいといったところがあったりして、子育てをするお母さん達にどう伝えていったらいいのかなと職場の皆で悩んだりもしています。あと、子育てはずっとつながっていくもので、少子化とか核家族化で自分の家には子どもと両親と、子ども一人という場合がとても多くて、私達は市の保健師として社会福祉協議会で町会ごとに地域で活動しているボランティアさん達の会に出向くこともあるのですが、主に活動されている方々は高齢者に視点を置いているのですが、ある地区の方は高齢者だけじゃなくて地域の人は皆同じだと。高齢者だけではなくて子育てをするお母さん達にも関わりたいと。で、お母さん達に子どもとの遊び方を教えたいとか、自分達がやってきた子育ては時代が違うからいいこと悪いことがあると思うが、自分達がやってきて良かったと実感できるものを伝えていきたいという、地域で暖かい目で見守って活動をしている方々がいるということは、私達も助けられているなど感じています。そういう地域がどんどん増えて地域で助け合う互助というのですが、家庭内におじいちゃんおばあちゃん世代がいなくても地域でおじいちゃんおばあちゃん世代が、町で会ったときに気軽に声をかけたりだとか、遊び方を教えたりだとか、そういう関わりができるというのはうれしいなと思います。

#### 《長谷川》

高山さんの話の中にたくさんのヒントがあったと思うのですね。一つは、子育ては環境と同じで循環型だと。生涯学習の基本構想を策定する際に考えたものは、それが育ちあがったらその人が次はリーダーになる。また次を育てていく、そういう循環がうまくいけば、いろいろな所へ貢献ができる人材バンクを市が常に持っていることになりやすいですね。このテーマだったらこの人にまかせればいいのだと。そういうことを構築していく一つのものが出てきたのかなと感じました。

あと、人に対して注意するという点で、アメリカから来た人のマナーが良いというのは、アメリカの学校というのは、日本でいう戦前のような財閥がたくさんあるところですからゆとりを持ったお年寄りがたくさんいて、学校へ入り込んでいるのですよね。で、廊下を走ると怒るのです。

#### 《Aさん》

でも、世界中ですよ、来ている人全員。ドイツ、フィンランド、フランス、たまたま今年は生徒がいいのかもしれませんが。

#### 《長谷川》

一方で日本のいいところは、どういう職業を持っ

ていても皆目が輝いているのですよね。階級制度がもっともない国だと思っています。全員が同じ目をしてられるのですよ。それぞれが100%大好きな職業に就いているというのはめったにないですけど。

#### 《司会》

今、Bさんのお話しに関連して、高山さんから子どもを叱れない親というお話しがあったと思うのですが、親として中学のPTAとしてCさんいかがですか？少し、高学年からの視点でお願いします。

#### 《Cさん》

PTAの役をやるようになって、講演会やこのような会に出る機会が多いのですが、その度に話しの中で出てくるのが、家庭のしつけの話です。少し、しつけから話しがずれてしまうのですが、私がいつも思うのは、生まれてくる子どもは皆一緒ですよ。その子がどう育っていくのかというのは家庭であり、もっと大きくすると社会情勢とか環境とかで、子ども達は変わって行ってしまふ。それで、ちゃんと育っていない子どもが問題になって、今の子ども達はとこういう場所で議論されると思うのですが、一部だと思うのです。本当は、家庭のしつけがちゃんとできていて、そういう子の方が多いはずなのです。でも、一部の子達が目立ってしまうから「ああ、今の子ども達は」と総括りで言われるのかなと思うのですが、私達の代も子どもの時に親の代の人達から「ああ、今の子ども達は」と言われたのだと思うのですよ。だから、時代時代で子ども達も変化してしまうというのは仕方ないのかなと思います。今の子ども達をああだ、こうだというよりこれから子ども達をどうしていくかと考えた時に、気付いた人が気付いたことを言ってあげることしかないのではないかなと思います。最近、子どもに声をかけられない大人が多い。「だめよ」と叱るのは勇気が要りますが、その前に「ねえねえ何をしているの」とちょっと声をかけることができない大人が多い。この時代に共に生きていて「私達の時代はこうだった」とか子どもに言うと、子どもは「時代が違うよ」と言いますが、本当にそうだと思うのですよね。時代が違うと思うのです。考え方も違ってきている、違う世代の人達とは生きた時代も違うし、意見をどうしたらいいのかと言ったら話し合うことなのかなと思います。何かあったときにも親子で話し合うとか、地域の人達と話し合うとか、学校と家庭とで話し合うとか。話し合いが大切かなと思っています。

#### 《Dさん》

少子化プロジェクトチームを福祉関係の視点と同時に子どもに対して広い視点でつくられたということですので期待しています。今、高山さんからの話しの中にもありましたが、地域で高齢者対象のもので福祉センターってありますよね。福祉センターという私達も高齢者のケアというイメージが

浮かぶのです。だけど、それと同じような子どもセンターとか、少子化というのはこれから子どもが育ちにくいという状況も出てくるでしょうから、そういう点で「子どものことはここへ行けば」という場所が、教育委員会にも相談室がありますが、市の行政の中でもできればいいと思います。プロジェクトの中で具体的な検討が進めばいいなと思っております。

#### 《長谷川》

文京区あたりでは、コミュニティセンターと学校が融合しているのですよね。土地が無いということをもうまく利用していますね。学校の土地を利用して、上層階だか下層階をコミュニティセンターや両親などが集まれる場所にしています。そういうのも一つの施策だと思うのですよね。子どもと大人と一緒に集えるというのが難しいのですよね。ハード的には空き教室が増えているということを見ると学校の数を減らすのではなくて、学校はそのまま残すのだけれどある部分は地域に開放するとか、それも一つの施策ですからね。これからはアイデア勝負ですからね。福生市が近隣の人達よりも意識レベルが高く、ディベートがきちんとしてきてということであるならば将来どんな状況になろうとも福生市に住んでいる私達は幸せかなと思います。

#### 《司会》

それでは、真野さん。その点も踏まえて、委員としての抱負などをお聞かせください。

#### 《PT真野》

就学前の場合なのですが、福生市では市立、私立合わせて保育園が12園あり、子育て支援をやっています。地域で分けて3箇所、健康センターと熊川体育館と福祉センターに12園の保育士が分かれて、月2回水曜日の10時から11時15分と時間は短いですが実施しています。今、育て方がわからなくて子どもを産んでしまって、どうしたらいいかわからないお母さんが多いです。そういう方の知恵にもなるようにということで、いろいろなおもちゃを出して親子で一緒に遊んでいただいたり、なかにはお母さん達が何回か会っているうちに友達になって、お母さんだけで集まっておしゃべりしたりとか子育ての話しをしたり、また子育てでいろいろ悩んでいるお母さん達には声をかけたりという活動をしています。最近は参加して下さる親子が多くなってきて、これからも工夫してやっていきたいなと考えております。

#### 《長谷川》

福生市にはハードは何でもあると。私の個人的な見解なのですが、何でもあるということは何でも中途半端だと。(笑)要するに小さいのはたくさんあるという感じですね。例えば、Dさんが言われたように教育に関する、少子化に関する総合的な会館をゆったりとした感じで造ってみるといかがかということも今日の思いの一つとしてあります。ハー

ドがないと絶対ソフトはありえない。ハードが充実しないとソフトは充実しない。だからハードは半分批判で半分誉めているのですけど。

#### 《司会》

一通り、ご発言いただきましたので、是非、これだけは言っておきたいと思う方ありますればお願いいたします。

#### 《Eさん》

僕もDさんと同じように少子化プロジェクトに期待を寄せています。批判ではなく体験談ですが、先日、3小の運動会が平日に行われました。自分の妻も僕も休みを取って出たのですね。平日なので運動会の後に仕事に戻らなければならず、子どもが2年生なので学童へ行かせました。僕は仕事に戻ろうとしたら、子どもが帰ってきて「学童に誰もいない」と。「公園に行ってくる」という書き置きだけあって誰もいないと。それで、公園まで車で送っていきましたが、児童を預かる機関なのに横の連携が取れていない。学童は社会福祉だと、学校は教育委員会だと、市民から見たら同じ子どもを扱うのに部署が違うということで連携がうまく取れていないというのはすごく不自然に感じます。それで縦割りの行政の横をつなげるということを聞いただけで、僕はすごく期待を寄せておりますので、何としても横のつながりがとれるネットワークを構築していただいて、情報の交換と連携を少しでもスムーズに取っていただけるようになればいいと思います。同じようなことで疑問に感じている方もたくさんいらっしゃると思います。

#### 《長谷川》

行政の方は一般にものすごく有能なのです。すなわちある部署にきて、3日たったらもう何年もいるような顔をしているのです。忙しい役所であればあるほどそうなのです。そういう意味では仕事への対応のスピードは他の職場では類を見ないと思います。ただし、後は人間性なのですよね、いくつか経験していれば、ある窓口に行った時に「それは向こうですが」ということでそこへ連絡してくれるかどうかなのです。それが「そこへ行ってください」なのですよね、これはまだいい方です。本当はそこへ連絡して、簡単にわかることならば聞いてあげますよという市民サービスをやってくれればいいのだけれど。一番悪いのは「それはうちの課ではありません」という対応なのです。市民も心の東京革命は必要なだけれど(笑)、役所も心の東京革命が必要かなと思います。

#### 《PT町田》

いろいろご意見をいただきましてありがとうございました。いくつかこの中で、可能かなとか難しいかなというのがこれからつめていく中では出てくると思いますが、基本的にはどなたも納得するような市の窓口にしていきたいという思いはあります。そのためにこれからきっちりプロジェクトチー





民からボランティアでスケートボードを教える指導者が出て、子ども達を集めてそして体育協会に入っている、このようなものがないと案外市が指導してもほとんど踊らないのですね。このフォーラムがそうです。私、失敗すると思ったら意外とよく来てくださるのですが、それでも市民の何パーセントの方が来てくれているのでしょうか。施策として取り組むのは難しいですが、提言として言うのはスケートボードに限らずトータルな施策の中には入っていくと思います。

《司会》

今の会場の設置については、既に議会でも質問が出ております。公園の中にスケートボード場を造ったらどうかとかフットサルのグラウンドを造ったらどうかなど。ただ、場所と時間とお金の問題がありまして。しかし、全く検討していないということではありません。

今日は、皆様方から貴重なご意見をいただいたと思います。こう言うと失礼かもしれませんが、新しく始まったプロジェクトチームの第2回目の会合だったのかなとそんな思いがいたしました。ありがとうございます。慣れない司会でまとめができず大変申し訳ないのですが、先生に最後に一言お話をいただきまして、お開きにさせていただきたいと思っております。

《長谷川》

せっかくですから、市のプロジェクトチームの会合に何回かに一回、今回お集まりの皆さんにお声をかけていただいて、拡大プロジェクトチームを開催されるのはいかがでしょうか。ということで、皆さん、今日は失礼いたしました。いろいろな意見が出てプロジェクトチームにとっては幸せだったのではないのでしょうか。

《司会》

これで、青少年の分科会については終了させていただきます。ありがとうございます。

終了